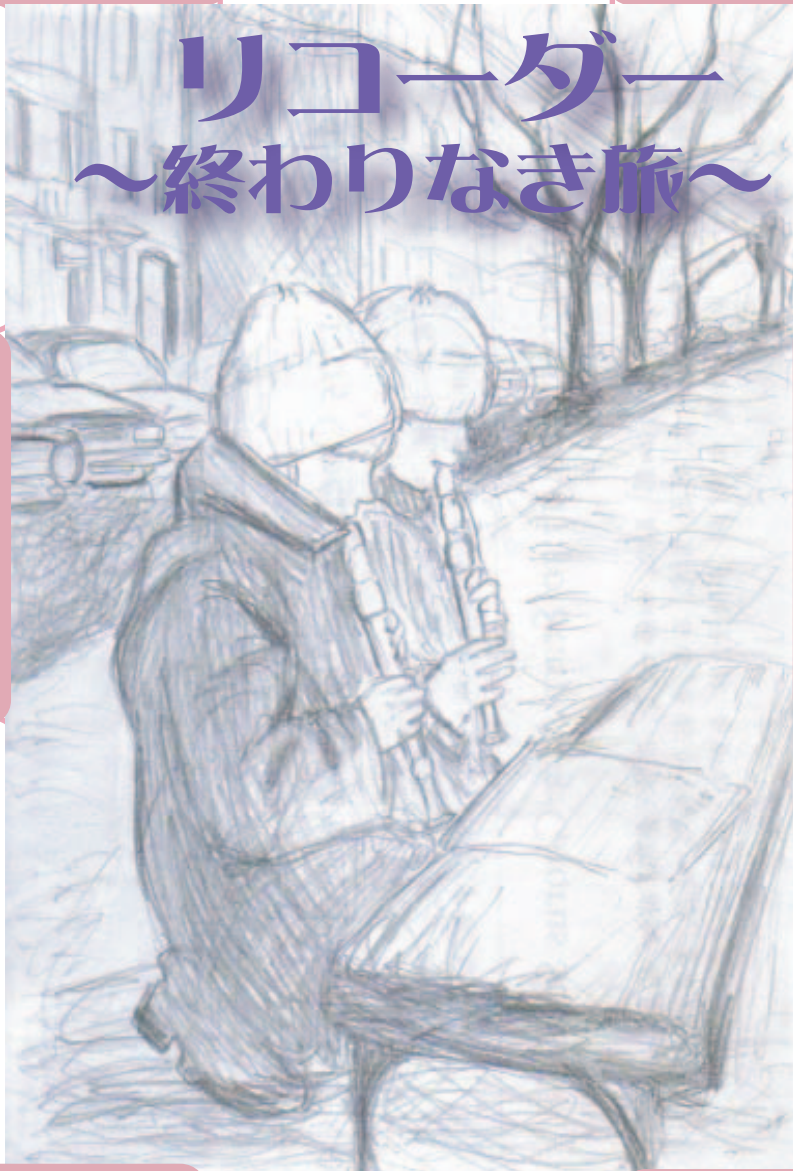


図書館展示●2005. 11. 11

第21回研究発表会資料展

リコーダー ～終わりなき旅～



企画・国立音楽大学音楽学学科3年

イラスト：武富僚子(音楽文化デザイン学科2年)

第21回国立音楽大学音楽学部 音楽学学科研究発表会資料

企画・構成
国立音楽大学
音楽学学科3年

リコーダーは、現在では、小・中学校での教育用楽器としてよく知られています。しかし、歴史を紐解くと、リコーダーは中世から現代まで、時代の変化に適応し発展してきました。ルネサンス、バロック期に全盛期を迎えた後、横吹きのフルートに取って代われ、芸術の世界から衰退していきました。そして20世紀、古楽器復興活動によってリコーダーは再び蘇り、今日では古楽器、現代音楽の演奏楽器、教育用の楽器として使われています。

今回の展示では、リコーダーに関する出版物を通して、リコーダーの生きた歴史を追うことにより、リコーダーの魅力に迫っていききたいとします。

Contents

- 2 リコーダーのはじまり
- 3 中世(4,5世紀~1450頃)
- 4 ルネサンス(1450頃~1600頃)
ルネサンス時代の音楽とダンス
書物から考察されるリコーダー
- 6 バロック(1600頃~1750頃)
バロック時代の出版物
イギリスにおけるリコーダー
バロック・ダンスとリコーダー・
バロックの作曲家
- 11 20世紀
- 12 図版パネル
- 13 展示資料

表紙
武富僚子
(音楽文化デザイン学科2年)

リコーダーのはじまり

リコーダーの構造に似た縦笛は、ヨーロッパだけでなく世界全体でみられ、それぞれ古い歴史を持っている。しかし、古代から伝えられてきた笛は、現在ではほとんど残っていない。そのため古い楽器の研究の手がかりは文学や美術に頼ることになる。

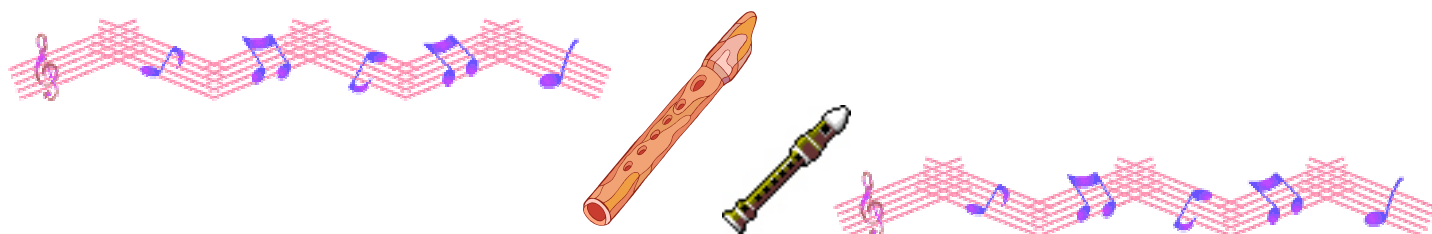
リコーダーが描かれている最も古い例は、グラスゴーの大学図書館にある12世紀の詩篇の中のもの、もう一つはオックスフォードのボドリアン図書館にある13世紀の賛美歌集の中のものである。年代は定かではないがその他の古い写本にも、羊飼いや天使、吟遊詩人たちがリコーダーを吹いている様子が描かれていたり、教会でショームや弦楽器と共に演奏されているリコーダーの彫刻を見ることもできる。これらの資料からは、リコーダー(おそらくリコーダーの構図に似た笛も含まれているだろう)が昔から用いられていたこと、歌の伴奏や声の代わりに使われていたこと、アンサンブルの中で独奏楽器として使われていたこと、同様にアンサンブル楽器としても使われていたことが見えてくる。

リコーダーという言葉は、現存している最古のものより後に現れたことが分かっており、それ以前は、リコーダーの類に対してパイプ(pipe)、フイスル(whistle)、フイストゥラ(fistula)という言葉を使っていたようである。

美術の面では、縦笛が描かれていても、多くは前から見たところしか描かれていないため、リコーダーの特徴である親指の穴を使っているかどうか分からないのである。仮に親指がその部分を押さえていても、本当に穴があったのか定かではない。リコーダーなのかリコーダーに似た笛(民俗的な笛)なのか判断は大変難しい。

私達が使ったようなリコーダー、前に7つ後ろに1つ(親指の穴)の指穴リコーダーの初期の歴史は、資料の上では、遅くとも14世紀頃からはじめられる。リコーダーに関する文献上初の出版は、1388年、ヘンリー4世の勘定書の「リコルドという笛」という項目である。ついで、1400年の文学作品「身分の低い盾持ち」では recorder、1440年の文学作品「Bochas」では recorder、1450年の文学作品「ふくろうの書」では recordour、1492年のヘンリー7世の記録文書には recorder, record, flote という名称が現れ始める。16世紀にはその数と確実性も増大する。

現存する最も古いリコーダーは、オランダの「ドルドレヒト」で15世紀の家屋の床下から発見された。にれの木から作られた長さ29cmほどのこのソプラノ・リコーダーは14世紀後半のものともみられている。



中世（4,5世紀～1450頃）

中世における音楽は、10世紀頃まで修道院を中心に展開されていた。しかし、11世紀に入って修道院を中心に展開されていた音楽は大きな変化を見せた。修道院だけでなく世俗社会でも音楽が親しまれるようになった。世俗音楽の興隆である。11世紀から13世紀にかけて世俗の音楽は最も栄えた。世俗音楽は、主に職業的音楽家のジョングルール、ミンストレル、ゴリアール、宮廷騎士歌人によって担われた。

ゴリアール(放浪学生)は聖職者を断念した、放浪学生のことである。放浪人生を楽しみながら、世の中に対する不満、風刺、恋愛、酒に関する歌曲を作った。その集大成が(カルミナ・ブラーナ)である。歌詞は、主にラテン語やドイツ語で書かれており、おそらくこの曲を演奏するときに、リコーダーもしくはリコーダーの構造に似た楽器を使用していたと思われる。

宮廷歌人とは、身分は騎士で、たしなみとして歌をつくった人達である。トルバドゥール、トルヴェール、ミンネゼンガ - と地域によって呼ばれ方が異なっていた。主に「宮廷の愛、貴婦人に対するの愛」について歌った。彼らは詩人兼作曲家であり、演奏は自らするのではなく、ジョングルールによって演奏された。ジョングルールは放浪楽師とも呼ばれ、音楽だけでなくアクロバットなどの大道芸人的側面を持ち、不浄なものを感じさせると地位は低かった。しかし、時には貴族のお抱えとなってミンストレルと呼ばれる身分に昇ることもあった。ジョングルールはいつでも、どこでも音楽が必要なときに現れ、お祭りでダンス音楽を演奏したり、宮廷の会食の場で音楽を提供したりした。

ジョングルールはリコーダーそのものより、リコーダーに似た構造を持つパイプ・アンド・テイパーという楽器の方を多く使っていたようだ。パイプ・アンド・テイパーは、多くの場合は穴が3つしかなく、片手で操作でき、息を強く吹くことでオクターヴを演奏した。肩からつるした太鼓を叩きながら演奏する一人二役の楽器である。この楽器は主に舞曲を演奏するために使われた。中世において最も重要な器楽曲の形式の一つであるエスタンピーなどを演奏していた。エスタンピーは、プロヴァンス地方を起源としており、14世紀、特にフランス・イタリアで流行した。芸人や放浪楽師たちの間でもお馴染みのレパートリーであり、一人でもメロディーと伴奏(リズム)を演奏できることから曲芸師たちに広く需要があった要因と考えられる。

手作りが可能で、費用がかからないリコーダーは、宮廷に入るよりも先に農民や吟遊詩人、曲芸師などの社会的身分の低い人の手にわたった。はじめは身分の低い人が扱っていたため「卑しい楽器」として楽器の地位も低いものだった。

しかし、教会で木管楽器や金管楽器が取り入れられるようになり、リコーダーも使われるようになってきた。16世紀にはヨーロッパ全てにわたり教会で演奏されていたようだ。宮廷に流入した経緯は定かではないが、おそらくジョングルール(ミンストレル)などがリコーダー、またはリコーダーに似た構造の笛を使って演奏したのがきっかけとなったのだろう。最後に、中世にはリコーダーの他、多様なホイッスル楽器があったのだが、その中でリコーダー、またはリコーダーの構造に似た笛だけが後世に残り、洗練した楽器へと成長していった。しかし、リコーダーの構造である、ホイッスル式マウスピースの独創的なアイデアがどのように発見されたのか知ることも困難なことである。

ルネサンス（1450頃～1600頃）

ルネサンス・リコーダーは独奏楽器としてよりも、むしろ合奏用に設計されていたので、ダンスや歌の伴奏として使用された。イタリアやイギリスのマドリガル(叙情詩に合わせて幾人かで歌う小曲)の音楽を編曲して演奏することも推奨されていた。

1. ルネサンス時代の音楽とダンス

ルネサンス時代になると、中世の教会中心の社会から人間中心主義の世界観へと変貌をとげ、笛の音楽的な楽しみが開放されていった。ダンスではイタリアが宮廷ダンスの中心地となり、近隣諸国へとその影響力を示してゆくことになる。例えばシチリア国王がフランスのナンシーで催した舞踏会では、全てのプログラムがイタリアの民俗舞踊を宮廷舞踏化したもので構成され、ヨーロッパ各国でもこの現象が広まった。このイタリアの影響は音楽にも表われている。ダンスの伴奏がリュートで行われるようになったため、その楽譜がタブラチュア譜として残されているものもある。その後 17 世紀に入ると優れたダンサーや教師を、ドイツ、フランス、ポルトガル、スペイン、イギリスなどに輩出していた。

優雅な宮廷舞踏が隆盛する一方で、ごく内輪で行う宮廷舞踏の中には松明を持って踊ったり、祝賀で踊られるような劇のついた踊りも踊られるようになった。またスペインではムーア人(イスラム系の人々)による侵略に伴い、イスラム風の文化が多く取り入れられ「モレスカ」というエキゾチックな踊りがヨーロッパ各地に広がった。踊り手は顔を黒く塗り、足に鈴を付けて鳴らしながら、リコーダーと小太鼓、バグパイプ、タンバリンに合わせて回ったり、ステップを強調したりしていた。そのルネサンス後期には、フランスでトワノ・アルポー Thoinot Arbeau(1525-1595)が著書 *Orchesography* を発表し、当時流行していたパヴァーヌ、ガイヤルド、クーラント、ガヴォットなどの踊り方や音楽を言葉で詳細に明記した。この著作は現在でもルネサンス・ダンスを理解する上で重要なものであるため、現在でも、講習会などで取り上げられる機会も多くある。また、*Orchesography* で扱われた譜例を元に作られた CD もあり、また *Orchesography* と同じ種類の舞曲は、16 世紀のフランスの作曲家ピエール・アテナン *Pierre Attaignant*(1494 頃-1552?パリ没)やオランダのティルマン・スザート *Tylman Susato*(1500?-1564?)などが多く書き残しているため、リコーダー・コンソートなどの形で現在でもレパートリーのひとつとして需要がある。これらの作曲家に限らず、当時は踊られることを想定して作曲されており、特定の振り付けに特定の音楽というよりは、例えばパヴァーヌ、ガイヤルドならその踊りにひとつの定型があり、舞曲と対応していれば国や作曲家を問わずに踊ることができたのである。しかし、ルネサンス初期のアテナンやスザートの器楽曲には楽器指定が特にされていなかったが、「演奏にはリコーダーかフルートが最も適している」と明記されていた。リコーダーがダンスの伴奏楽器として好まれた理由としては、拍のはっきりした曲や快活な曲にはどうしても明瞭なリコーダーの音が必要であったためとされる。楽器の指定がされるようになったのは中期から後期にかけてのことであったようだ。

2. 書物から考察されるリコーダー

1511 年、セバスティアン・ヴィルドゥング *Sebastian Virdung*(1465?-1511)によって *Musica Getutschut und Ausgezogen*(ドイツ語による音楽概念)が出版された。この書物は、110

ページにわたって弦楽器、打楽器、吹奏楽器の3種類について論じた器楽書で、リコーダーについては巻末の18ページが割かれ、図解とかなり詳細な論考がなされている。またこの器楽書は、ルネサンス時代の初期リコーダーに関する情報を提供している。

内容は、対話形式で進められるが、指孔の話のところでは、前面に七つの指孔と背面に1つの指穴がある、と紹介されている。実際には左利き奏者のために9番目の指孔がつけられており、右利き、左利きの人々がどのようにリコーダーを持つかを示す木版画も載っている。また、図から当時使われていたリコーダーは1本の円筒形からなっていたことが分かる。

ルネサンス・リコーダーは、音が柔らかく、低音から高音まで様々なサイズがあり、ポリフォニーな音楽を演奏しやすい構造になっている。円筒型の構造は、倍音を伴わない純粋な音色が得られ、低い音域にも音量がある。しかし、豊かな低音が得られる反面、倍音が少なく音域は1オクターブと少ししか出ない。リコーダーは、声楽の各パートに相応する点から、声楽のパートと入れ替えたりすることもあり、またリコーダーの曲もアンサンブルが中心であった。

当時すでに4本あるいは6本のリコーダーがワンセットとして使用されていたという対談も記録されている。四声部の曲を演奏するために1本のディスクント、2本のテノール、1本のバスか、あるいは、2本のディスクント、1本のテノール、1本のバスといった2種類の組み合わせを推奨している。そして6本の組み合わせには2本のディスクント、2本のテノール、2本のバスを挙げている。このことは1500年の初めの頃にはすでにリコーダーのみの組み合わせによる演奏、つまりホール・コンソートが行われていたことを示している。

残念ながらこの書には、音の出し方、プレス、コントロール、アーティキュレーションなどの演奏法に関する指示がほとんどなされていないため、ルネサンス時代の演奏面についての情報はあまり得られない。しかしながら、リコーダーが、古い時代には鳥の鳴き声の調教具として用いられ、また、こどもへの玩具として与えられるといった役割をはるかに越え、楽器としてしっかりとした地位を与えられていたことをはっきりとこの書は示している。

同時代に出版された書物には、以下のものがある。

- ・ Martinius, Agricola: *Musica Instrumentalis Deudsch*; 1529年, Wittenburg *ドイツの楽器
- ・ Sylvestro, Ganassi del Fontego: *Opera intitulata Fontegara*; 1535年, Venice *フォンテガーラ
- ・ Philibert, Jambe de fer: *Epitome Musical des Tons, Sons et Accoedz, es Voix Humaines, Flevstes d Alleman, Fleustes a neuf trous, Violes, Violons*; 1556年, Lyon *楽音、和声、人声、フルート、リコーダー、ガンバ、ヴィオリンに関する概説

これらの本はドイツ、スイス、イタリア、フランスなどヨーロッパの国々で出版されていることから、リコーダーはすでに相当広い範囲に分布していたことが分かる。また、この時代に出版されたものは先ほどの書『ドイツ語による音楽概念』と同様、基本的な指示にとどまり、一冊の中にリコーダー以外の楽器をも扱っている総合的な器楽書である。それに対して1535年の『フォンテガーラ』は、かえ指、ディヴィジョン、タンギング、音の出し方など細かく記されており、リコーダーの専門書としては、最初の教則本であった。

その時代、イギリスは、ヘンリー8世の時代だった。彼は、音楽を好み、自身はリコーダー、フルート、ヴァージナルを演奏していた。1547年、彼の死去の際に作成された楽器目録には、ヴァージナル、レガール、ホルン、クロムホルン、フルート、オルガン、リュートがあり、フルートは少なくとも72本、そして、リコーダーは、つげ材、象牙、クルミなどで作られたも

のなどが全部で76本あった、と記録されている。

一方、教会においても、リコーダーは活躍の場を持っていた。書物によると、16世紀には、ヨーロッパすべてにわたって教会でリコーダーが演奏されていたと記録されている。1586年、スペインのセビリア大聖堂では、「大きな典礼においては、常にリコーダーで詩を演奏すること。サルベス(マリア賛美の式)の場合は、演奏される3つの詩のうち、1つはショーム、1つはコルネット、他の1つはリコーダーで演奏すること。」と指示されている。

エリザベス王朝時代の曲は、現在多くがリコーダー用に編曲され、演奏されているが、ほとんどがヴィオールか鍵盤楽器のための曲であった。しかしながら、リコーダーが歴史から消えてしまったのではなく、1575年エリザベス女王のケニスワースでの歓迎の様子を記した記録文書には、女王を歓迎するために城までの道の両側の柱にいろいろなものが飾りつけられ、その中にリコーダーが含まれていたことが書き残されている。また、1600年の文学作品、シェークスピアの『ハムレット』には、第三幕第二場の中に、「“ventag”は指と親指のためにリコーダーの中へあけられた孔であり、そして“stop”はいくつかの音のために必要な指の位置である。」や、「この指孔を親指と他の指で押さえて、口にあてて、息を吹き込めば、ひとりでよい音色がでる。」のように王子ハムレットが、ギルデンストーンにリコーダーについて話すシーンが見られる。さらに、1603年のエリザベス女王の葬儀の際には、7人の宮廷リコーダー奏者(5人のベネチア人とフランス人とイギリス人)が正式な宮廷の喪服を着用することが許されたと記録されている。このことからリコーダーは、音楽好きの権力者の下で保護されていたため、ますます発展していくこととなる。

バロック (1600頃 ~ 1750頃)

1. バロック時代の出版物

1619年にヴィッテンブルクで、ミハエル・プレトリーウス Michael Pretorius(1571?-1621)によって *Sytagma Musicum* (音楽大全) が出版された。この書物は、全3巻からなる楽器とその音楽に関して総合的に扱う器楽書である。リコーダーに関しては2巻でふれている。その中には、かの有名な8本のリコーダーの図版が掲載されている。これは初期のリコーダーを知る上で最も重要な資料である。ご覧のとおり、これらは、サイズやピッチの異なることが分かるほか、頭部管のみを動かすことのできる1本の木から作られたものであることが分かる。これはルネサンス・リコーダーと普通呼ばれるものである。

その他の出版物には、以下のものがある。

- *Tutto il bisognoevole per sonar il flauto a 8 fori pratica et orecchia* ;1630年, Italy
* 完成されたそして正確な方法による8つの指孔のリコーダーを演奏するために必要なすべての指導
- *Marin Mersenne: Harmonie Universelle* ;1636年, Paris
* 全世界の音。3巻からなっているが、リコーダーについては3巻に書かれている
- *Jacob Van Eyck: Der Fluyten Lust-Haf*;1646年, Amsterdam
* 笛の楽園。3巻からなっている。その中にはエリザベス時代に流行した曲をもとにEyckがヴァリエーションを加えたおよそ150曲が収められている
- *Bartolomeo Bismantova: Compendio Musicale*;1677年, ヘラーラ * 音楽概要

これらからはリコーダー自身の変化が見て取れる。17世紀前半は、9つの指孔を持ち円錐

形の1本の木から成るものが広く一般に使われていた。しかし、17世紀後半になると、頭部管・中部管・足部管の3つに分ける事のできるバロック様式のリコーダーが見られるようになった。

少なくとも1677年のピスマントーヴァ『音楽概要』が出版されたときには、3つの部分から成るリコーダーがあったことが分かる。3つの部分からなるリコーダーは、製作者が管の内側を六つの違った角度に削ることができるようになったために、特に高いオクターヴの音程がよくなった。この新しいリコーダーにより、リコーダーはますます人気を博していくこととなった。

また、この中で注目されることは、ヤコブ・ファン・エイク Jacob Van Eyck(1590-1657)の『笛の楽園』をはじめとして、リコーダー専用の練習曲が出版されるようになったことである。これらの練習曲は後に続くイギリスの出版物に影響を与えた。

2. イギリスにおけるリコーダー

リコーダーの人気が顕著にみられたのがイギリスだった。

当時の音楽の様子を私達は、サミュエル・ピープス Samuel Pepys(1633~1703)によって書かれた日記から知ることができる。ピープスはリコーダーに没頭した17世紀のイギリス官僚で、10年間に及ぶ膨大な日記を書き残している。1668年に彼は『The Virgin Martyr』(処女殉教者)という芝居を見に行き、「管楽器による音楽」に感銘を受けた。おそらく彼はリコーダーにすっかり魅せられたに違いない、というのも彼はその後リコーダー奏者になったからである。この当時イギリスでは、古くから人々に親しまれていたフラジオレットに人気があった。1661年に、トマス・グリーティング Thomas Greeting(?-1682)によって *The Pleasant for the Flageolet* が出版されている。このことはピープスの日記の中からもしばしばうかがえる。

では、リコーダーに関する書物はどうか。1679年にロンドンで、ジョン・バジバッド John Hydgebut(1679-99頃活躍)によって *A Vade Mecum for the Lovers of Musick, shewing the Excellency of the Rechorder: With Some Rules and Directions for the Same*(リコーダーの素晴らしさを示し、かつルールと指導を伴った音楽愛好者のための小型解説書)が出版された。これは、イギリスで出版された最初の指導書で *A Vade Mecum*(小型解説書)というラテン語のタイトルをもつ小さな本である。この指導書は、序文、リコーダーの保持法、演奏法、装飾法、音の名称、運指といった指導内容と、ハジバットによって収集された最新の曲が載っている。また、この指導書“*A Vade Mecum*”はポケットサイズだったこともあり、紳士達のポケットの中に入れて持ち歩かれる身近な存在として、人々の生活に浸透していった。

次にイギリスで出版された指導書は、1683年ロンドンで、リチャード・ハント Richard Hunt(?-1683)と Humphry Salter によって書かれた *The Genteel Companion; Being exact Direction for the Recoeder: With a Collection of the Best and Newest Tunes and Grounds Extant*(紳士の友、最上で最新の曲と現存する変奏曲のコレクションを伴ったリコーダーのための正確な指導書)である。

次に、1686年ロンドンで出版されたのが、ジョン・プレイフォード John Playford(1623-1686)とジョン・カー John Car(1672-95頃活躍)による *The Delightful Companion: or, Choice New Lessons for the Recorder or Flute, to Which is added, Several Lessons for Two and Three Flutes to play together*(愉快な仲間:リコーダーまたはフルートのための新

しい曲の真髄 二重奏または三重奏の曲が数曲取り入れられた)である。彼は、最初初心者が守るべき二つの注意をしている。一つは、正しくリコーダーを持つこと、二つ目は、孔の上に決められた指を正確に置くことである。

次に出版されたのは、1693年～96年ロンドンで、John Hudgebutとヘンリー・プレイフォード Henry Playford(1657 1704)によって書かれた *Thesaurus Musicus: Being, A Collection of the Newest Songs Performed at their Majesties theatres; and at the Consorts in Viller-Street in York-Buildings, and in Charles-Street Convent-Garden*(Majesties 劇場、York-Buildings 内の Viller-Street におけるコンサートと、Charles-Street Convent-Garden において演奏された最新の歌コレクションをともなった新しい音楽)である。これは全 5 巻で構成されている曲集である。この本は演奏についての指示は何もされておらず、指導書というよりむしろ完全な曲集であった。

いくつかのリコーダーに関する書物を見てきたが、これ以降も短期間の間に様々な指導書や曲集が出版されており、そのほとんどがイギリスで出版されている。このことからリコーダーがイギリスで非常に栄えており、かなり広い層の愛好者がいたであろうということが分かる。さらにこの指導書は主に初心者を対象にして書かれている。指導内容については、リコーダーの保持法に始まり、運指、記譜法、装飾音などの初歩的な理論的指示がなされている。このことから愛好者の層は、技術的にはあまり高くなく、むしろ楽しみとしての音楽であったことが推測される。そのためなのか、指導書や曲集にのっているリコーダー曲の趣向は、当時流行した歌のメロディーをリコーダー用に移調して吹いていたようである。

このようにもてはやされたリコーダーであったが 19 世紀にはその名をほとんど見ることはなくなっていくのである。リコーダーは、楽器としての役割を後退するにつれて、その名称に変化がみられる。教則本からリコーダーの呼び名を取り出してみる。

出版年	名称	書名
1679	Rechoder	Vade Mecum
1683	Recorder	The Genteel Companion
1686	Recorder or flute	Delightful Companion
1693	Recorder	Thesaurus Musicus
1695	flute,recorder	The Compleat Flute Master
1706	Flute	The Flute Master
1707	la flute a bec, Flute douce	Principes de la Flute Traversere
1717	Flute	The Bird Fancier s Delight
1725	Flute	The New Flute Master
1730	Flute	The Second Book of the Flute
1731	Flute	Direction for Playing on the Flute
1732	flute a bec,Common English flute	New system of the Flute a bec
1735	Flute	Airs for the Flute
1740 ~ 60	Flute	The Complete Flute Master
1758 ~ 61	Flute	the Compleate Tutor for the Flute
1770	Flute	The Elements of Music made Easy
1779 ~ 98	common flute	Compleat Instruction for the Common Flute

上記の指導書はすべて、リコーダーのための指導書である。そのことは、それぞれの指導書に掲載されている木版画からみることができる。この資料から、17世紀の末期までは、その楽器はリコーダー(recorder, rechorder)と呼ばれていたが、しかし、18世紀に入るとリコーダーという言葉は完全に消え、フルートがそれにとってかわった。1730年代には、イギリスのみならず、スコットランドでもフルートと呼ばれていた。そして18世紀のイギリス人のほとんどはリコーダーの名称を知らなかったという。しかし、フルートということばも18世紀の末期には、ジャーマン・フルート(横吹きのフルート)にとってかわられ、結局「コモン・フルート」がリコーダーの最後の呼び名として残った。そしてこれ以降、リコーダーの指導書は20世紀までほとんどといっていいほど出版されなくなった。

3. バロック・ダンスとリコーダー

オランダのエイクによる(笛の楽園)は、現在でもリコーダー曲の重要なレパートリーであり、演奏される機会も多い。またエイクが変奏を行った曲は、オランダ国内にとどまらず、有名などころではイギリスのジョン・ダウランド John Dowland(1563-1627) (涙のパヴァーヌ)やイタリアのジュリオ・カッチーニ Giulio Caccini(1550?-1618)の(麗しのアマリッリ)なども行っている。変奏をすることによって華麗な技巧テクニックを聞かせる曲が好まれるようになり、変奏とダンスは17世紀前半に密接な関係となる。ガイヤルドやパッサ・エ・メッソでは音楽に合わせて即興と変奏を繰り返し踊ることができた。しかしより高度な技巧テクニックを必要とする変奏組曲はダンスには直接結びついていないのではないかと推測されている。

17世紀のバロック時代に、リコーダーとダンスの結びつきはフランスにおいてその栄華を極めることになる。ルイ14世は音楽や舞踏に極めて強い関心を抱いており、自らも教師をつけ、ダンスを踊ったり、バレエに出演したりしていた。17世紀、とくにメヌエットは「ダンスの女王」と呼ばれ、もとは民衆のダンスだったものがルイ14世によって宮廷化され、あらゆる人々に親しまれた踊りに発展した。1600年から1650年頃にかけて、ダンスは大きな変革がなされ、ピエール・ポーシャン Pierre Beauchamp(1636-1705)によって5つのポジションが確立された。これが今日でのバレエのポジションの基礎となっている。

フランスの宮廷でのジャン-バティスト・リュリ Jean-Baptiste Lully(1632-1687)の活躍は、スペクタクル劇からトラジェディ・リリック Tragedy Lyric、オペラにまで至る道筋を作り、これはフランス式オペラの確立となった。この間、特に17世紀末の25年間にバロック・ダンスは完成を見ることになったとされるが、それ以前にもリュリは特定の曲に特定の振り付けをするなどしており、実際の最盛期は1650年頃とするのが通例のようである。

当時宮廷で流行したダンスは、メヌエット、コントルダンス、シャコンヌ、パッサカリアなどがもてはやされた。とりわけメヌエットやコントルダンスは平易なダンスであり、舞踏の花形として18世紀に至るまで長くその王座に君臨し続けた。

社交舞踏の多くのダンスに付ける音楽は、舞踏会の度に書き下ろされる新作を演奏していた。楽譜は単旋律で書かれ、それをリコーダー、オーボエ、ヴィオラ・ダ・ガンバ、チェンバロなどで構成された編成に編曲して演奏された。この新曲にも楽器の特定はされておらず、基本的にはどんな楽器を使っても問題はなかった。しかしこの中でリコーダーが重要な役割を占めていたことは言うまでもない。前述したように、リコーダーの明瞭な発音と澄んだ音は拍のはっきりとした音を生み出すことができるために重宝していた。

舞踏会でリコーダーが使われていたという証拠は、現在では絵画に描かれたものを手がかりにすることができる。新作の書き下ろしには必ずそれに伴った振り付けが表記されるようになった。そのダンスの表記方法はそれまで言葉や絵によるものばかりだったが、1700年には振付師のラウル-オージェ・フイエ Raul-Auger Feuillet(1659-1710)が「舞踏記譜法」を発表した。これは、つま先と踵の位置を点と線で示し、特定の記号が踊りのある振付を示すように、簡素に記号化したもので、同時に音楽の小節線も書き記されたため、現在でもそれを解読することによって踊りを復元することができる。このシステムが開発されたことによって表記が容易になり、多くの教則本が書かれ、新作の音楽と振付が表記されたダンス集のようなものも作られ、毎年発表された。

このように宮廷舞踏が最盛期を極める中で、音楽では凄まじい量の舞曲が作曲された。ドイツのヨハン・ヤーコブ・フローベルガー Johann Jakob Froberger(1616-1667)らによって、速度の異なる舞曲を一組にする基本舞曲(アルマンド、クーラント、サラバンド、ジグ)が形成され、フランスではクーブラン一族によってオールドルという様式が確立された。多くの作曲家が雇い主から依頼された作品として作曲・演奏しているため、当時の器楽音楽の重要な役割を担っていたにもかかわらず、実際は踊るための曲としての位置づけに変わりはない。しかし16世紀から17世紀にかけてイギリスでは、ウィリアム・バード William Byrd(1543-1623)などのヴァージナル奏者によって、単に踊られるだけではなく、器楽で演奏するためだけに作られた舞曲も多く存在するようになった。

4. バロックの作曲家

バロック時代になると、リコーダーは、主にソロ用の楽器として用いられるようになる。楽器の音色も力強く、鋭い音に変化し、独奏曲またはトリオソナタや協奏曲が数多く作曲され、リコーダーは最盛期を迎えた。この時代多くの作曲家がリコーダーのための作品を残している。

まず、当時リコーダーに最も貢献した作曲家としてゲオルク・フィリップ・テレマン Georg Philipp Telemann(1681-1767)があげられる。彼は少年時代からリコーダーを好んで吹いており、演奏の名人であったとも言われている。ソロソナタの数はあまり多くはないが、ソナタ、トリオソナタ、協奏曲などを作曲し、音域も全音域を使っており、すべて高度の技術を要求するとともに、音楽的にも優れた作品が多い。また、ヨハン・セバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach(1685-1750)は、リコーダーのためのソナタは残していないが(ブランデンブルグ協奏曲(第2番へ長調および第4番ト長調))の中でリコーダーを独奏楽器として用いているほか、カンタータの中でオブリガート楽器として数多く用いられている。そのほかゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル Georg Friedrich Handel(1685-1759)は(7つのソナタ)、(2つのトリオソナタ)のほかオラトリオやオペラの中にリコーダーを用いている。テレマンなどに比べ、比較的演奏しやすいものが多い。イタリアでも、アレッサンドロ・スカルラッティ Alessandro Scarlatti(1659-1725)やフランチェスコ・マリア・ヴェラチーニ Francesco Maria Veracini(1690-1750)がリコーダーのための作品を残している。

こうして、全盛期を迎えたリコーダーであったが、その後、1750年を過ぎると、リコーダーは急速に用いられなくなった。18世紀にはアマチュアがリコーダーを吹いたように、ヴィクトリア王朝時代の紳士淑女が、フルートを用いてその頃もてはやされたオペラ風アリアの変奏曲を演奏することが流行したのである。フルートは次第にその地位を高め、テオバルド・

ベーム Theobald Boehm(1794 1881)によるキー・システムの発明のおかげで、バロック・フルートよりも、強力な音があらわれたこともあり、19世紀には、一流の楽器になった。楽曲も室内で楽しむ小編成の楽曲からオーケストラによる大編成の音楽に移行し、リコーダーは横吹きフルートに取って代われ、徐々に芸術の世界から衰退していったのである。

20世紀

20世紀の中ごろから、ヨーロッパでは古楽への関心が高まり、歴史的な楽器の収集や演奏が積極的に行われた。リコーダーにおいて注目すべきことは、イギリスにおける古楽器の製作である。アーノルド・ドルメッチ Arnold Dolmetsch(1858 1940)は、偶然手にした古楽器を修復することから始め、様々な楽器を復活させ、人々に古い音楽を聞かせていた。中でもリコーダーは高品質で、ドルメッチ家の家業の中心となった。ドルメッチが最後に腰を据えたヘーズルミアでは、最初の古楽音楽祭が行われ、多くの音楽家が参加し、その音色を体験した。その中にドイツ人のペーター・ハルラン Peter Harlan(1898 1966)という人物も参加していた。彼はドルメッチの吹くリコーダーに興味を持ち、この古楽器がもっと簡単に製作できる可能性を感じ、ドイツで試みる決心をしたのである。これが現代日本では一般的に教育で使用されているジャーマン式リコーダー誕生のきっかけである。しかし、この製作はリコーダーをより人々に身近なものとしたが、大きな誤りがあった。これが現在問題とされている、バロック式、ジャーマン式の違いである。

日本ではプラスチック・リコーダーの誕生で、教育楽器として使用され長年親しまれてきた。国民の半分以上が吹いた経験があると思われるが、続けていく人はそれに比べはるかに少ない。しかし、大学のサークルや個人の団体、音楽教室等、熱心なアマチュアの活動は注目に値するだろう。

現代ではプロの演奏家も多数活躍している。最近では古楽ばかりでなく、新しい奏法を利用した斬新な曲が演奏されるようになってきている。多くの邦人作曲家がリコーダーのための曲を作り、世界的な評価を得ている。

今後、リコーダーの可能性はまだまだ広がっていくだろう。長い歴史を経てきたリコーダーが、現代まで生き残ってきたのには、リコーダーがその時代時代の様式に適應し、音楽の発展に寄与できるという個性を持ち併せていたからではないだろうか。創造的な演奏家の出現と共にリコーダーは生まれ変わって行くのである。

参考文献

『笛の楽園 僕のリコーダー人生』朝岡聡著 東京書籍 2003年 <J95-211> / 『リコーダーとその音楽』エドガー・ハント著 西岡信雄訳 日本ショット社 1985年 / 『古楽の旗手たち』佐々木節夫著 音楽之友社、2000年 <C64-305> / 『西洋音楽の歴史』高橋浩子 中村孝義 本岡浩子 綱干毅編著 東京書籍 2004年 <C60-739> / 『リコーダーの奏法』多田逸郎著 アカデミア・ミュージック 1969年 <C17-898> / 『古楽とは何か』ニコラウス・アーノンクール著 音楽之友社 1997年 <C62-036> / 『リコーダー-Vol.1 日本リコーダー協会 1966年4月号 <P712> / 『古楽の復活』ハリー・ハスケル著 東京書籍 1992年 <C56-749> / 『初心者のリコーダー入門 0からはじめる音づくり』藤本祐三著 オンキョウパブリッシュ 1999年 / 季刊リコーダー 芸術現代社 1974年 <P712> / 『楽器の生い立ち 誕生から現代まで』メアリ・レムナント著 郡司すみ訳 日貿出版社 1982年 <C35-037> / 『リコーダーとリコーダー教育のあけぼの』リコーダーの本』柳生力著 第20号 草思社 1982年 <P1776> / 『リコーダーのテクニク』A. ロウランド・ジョーンズ著 西岡信雄訳 音楽之友社 1967年 <C29-231> / 『楽器の博物誌』朝日新聞社編 朝日新聞社 1986年 <C23-047> / 『古楽演奏の現在』音楽之友社 1993年 <C57-597> / 『ニューグローヴ世界音楽大辞典』講談社 1995年 <X-001 NG>

展示資料

図版パネル

リコーダーの種類

写真、左上から右へ

象牙のソプラニーノ f´ (ヨハン・クリスティアン・デンナ、18世紀初頭)2重リコーダー(クリスティアン・シュレーゲル、18世紀前半)、アルト g´ (18世紀)、アルト g´ (17世紀)、アルト f´、アルト f´ (F.レーナー、18世紀)、象牙のアルト f´ (18世紀)、アルト f´ (Jon.Chr.デンナー)、アルト f´ (H.シェル、18世紀前半)、アルト es´ (18世紀)、テノール d´ (リッパート、18世紀初頭)、テノール d´ (18世紀)、バス g (Chr.シュレーゲル)、バス f (Chr.シュレーゲル)

中世の音楽家

旅の minstrel が中世の呼び物である一方、一家専用に音楽家を抱えることもあった。左端の minstrel がもつ楽器は、パイプ & テイパーと呼ばれ、リコーダーは多くの場合穴が3つで片手で操作し、肩から吊るした太鼓をたたきながら演奏する。12世紀から13世紀にヨーロッパで広まった。

『音楽大全』の中のルネサンスリコーダー

1619年、ヴィッテンブルクで Michael Pretorius によって出版された、全3巻からなる楽器とその音楽に関して総合的に扱う器楽書。第2巻に、リコーダーの記述があり、8本のリコーダーの図版が掲載されている。これはルネサンスリコーダーと呼ばれるもので、当時のリコーダーを知る上で重要な資料である。

『フォンテガーラ』

聖マルコ大聖堂の楽器奏者、ガナッシによるルネサンス期のリコーダー入門書『La Fontegara』(1535年)のタイトルページ。リコーダーのみを扱う最初の教則本として知られている。中心の三人がリコーダーを吹いている有名な絵である。

リュリ肖像画 Jean-Baptiste Lully (1632-1687)

イタリア生まれのリュリはルイ14世のお抱え作曲家として、またダンス教師として宮廷で活躍した。多くの舞踏曲を作曲し、またバレエの発展にも大きく貢献した。

『フルート演奏の指針』

『Modern Music Master』(1960年)より『フルート演奏の指針』(1752年)の口絵。後期バロックの重要な管楽器教本である、クヴァンツの『フルート演奏の指針』では、リコーダーとフラウト・トラヴェルソの2種類の笛を完全に区別しその教授の個所ではフラウト・トラヴェルソのみを扱っている。このことから、リコーダーがその全盛期を終え、フルートへと移行していったことが分かる。

宮廷でのダンス風景

17世紀フランス宮廷での宮廷舞踏の一場面。一組のカップルがヴェルサイユ宮殿内の“petit parc”でダンスを披露している。楽器伴奏として、リコーダーも使われていた。

ストラスブールのメニューエット

1680年、フランスはドイツ国境近くの都市、ストラスブールを併合した。中央の男性はストラスブール訪問から戻ったルイ14世だと言われており、この併合を記念して“Le Menuet de Strasbourg”が作曲された。左手前の女性がその楽譜を手に入れている。

ドルメッチの肖像画 44歳 1903年撮影

ドルメッチは1889年から古楽器の製作を始め、様々な場所で演奏会をしていた。この写真が撮影された1903年は、三番目の妻であるマーベルと結婚した年で、翌年からマーベルとの間に二男二女をもうけている。

ドルメッチ・ファミリー

ドルメッチ家には芸術家や貴族など多くの人々が集まり、演奏会を楽しんだ。リュートを演奏しているのがドルメッチ。リコーダーを吹いているのが息子である。

カテリーナ古楽合奏団

1973年、松本雅隆(クルムホルン、リコーダー、バグパイプ、ハーディ・ガーディ、他)により結成された。中世・ルネサンス時代のヨーロッパ音楽、古楽を現代に再現することを目指し演奏活動を行っている。

フランス・ブリュッヘン

1934年10月30日にオランダ、アムステルダムに生まれる。リコーダーを独奏楽器として世界に広めた名演奏家。20世紀のリコーダーを語る上でなくてはならない人物であり、その卓越した技巧により「玩具のような楽器」を国際的な人気楽器へと変えた。

東京リコーダーオーケストラ

リコーダー四重奏

中学校の音楽教育で使用されるリコーダー。左から、ソプラノ、アルト、テナー、バスリコーダー。

リコーダーを吹く少年

一本の木からなるルネサンス・リコーダーを少年が吹いている。少年の名は Nathaniel Hone(1718～84年)。

図書

『中世・ルネサンスの社会と音楽』 今谷和徳

音楽之友社 1983年 請求記号 C43-447

著者は、音楽を深く理解するためには中世・ルネサンス時代において、音楽は社会とどのように関わり、社会の中でどのような意味を持っていたのかということを知る必要がある、と述べている。この著書では、社会の中での音楽の動きや意味をとらえようとしている。

『中世・ルネサンス楽器の歴史』 デイヴィッド・マンロウ著 柿木吾郎訳

音楽之友社 1979 請求記号 C28-949

ヨーロッパで16世紀以前に使われていた様々な楽器を紹介している。豊富な絵、図版とともに各楽器の歴史、特徴、奏法などの記述がある。

“Thoinot Arbeau Orchesography(オルケソグラフィー)”

New York Dover Publications, [1967] 請求記号 C34-136

この書物は1588年にトワノ・アルポーによって出版され、当時流行していたパヴァーヌ、ガイヤルドなどの舞曲について詳細に記してある。舞踏の歴史を知る上で重要な書物であり、リコーダーの使い方についても触れている。

『木管楽器とその歴史』 アンソニー・ペインズ著 奥田恵二訳

音楽之友社 1965 請求記号 C17-891

木管楽器の歴史、構造、奏法の変化などについて詳細に記されている。リコーダーについての記述もある。

『栄華のバロックダンス 舞踏譜にルーツを求めて』 浜中康子

音楽之友社 2001年 請求記号 C65-221

バロック・ダンスの舞踏家として活躍する浜中氏がフランス宮廷でもはやされたダンスの種類・舞踏譜などについて解説した本。ファイエの「コレグラフィ」に記されている舞踏譜の解説の仕方を実際に読み解きながら、様々な種類のダンスの踊り方を文章と絵で説明している。

“Dance of Theater” Wendy Hilton

Dance Books 1981 請求記号 C46-556

17世紀から18世紀にかけてのフランスでのダンスの歴史を追った本。ダンスだけでなく、作曲家・ダンサー・演奏家・舞踏譜・教則本について詳細に説明されており、多くの譜例・舞踏譜・絵と共に当時の様子をうかがい知ることができる。著者のウェンディ・ヒルトン氏はアメリカで活躍するバロックダンサーであり、振付家・研究者として多くの大学で教鞭をとり、後進の指導にあっている。

『フォンテガーラ』 シルヴェストロ・ガナッシ著 戸口幸策訳

全音楽譜出版社 1978年 請求記号 C35-041

聖マルコ大聖堂の楽器奏者、ガナッシによるルネッサンス期のリコーダー入門書。リコーダーの基礎的な練習法と装飾法が示されている。人間の声は様々な声色を発することが可能であるが、楽器も人の声と同じように表現できなければならないとし、その習得を目的としている。この入門書からは14世紀のこの時代までにリコーダーはかなり高度な技術を持っていたと推測される。

“Dolmetsch the man and his work ” Margaret Campbell

Hamilton 1975 請求記号 C23-341

ドルメッチの生涯と業績について詳細が書かれている本。写真も多く、出来事に分けられて記述されている。

『リコーダー復興史の秘密 - ドイツ式リコーダー誕生の裏舞台』 安達弘潮

音楽之友社 1996年 請求記号 C61-280

著者は教育者としての立場から、リコーダーが教師の間でも簡易な楽器という認識が根強く、音楽的なものと理解されないのは、リコーダーの歴史的背景の認識不足なのではないかとし、日本におけるリコーダー教育のあるべき姿を考え直す手助けとしてこの本を書いている。

“The Cambridge Companion to recorder” John M.T

ケンブリッジ大学 1995年 請求記号 J81-860

中世・ルネサンスから現代に至るまで、リコーダーの歴史、レパートリー、演奏家、20世紀におけるリコーダーの復興、そして教育など、リコーダー全般にわたる内容の論文が編集されている。図版も多く、初心者にも分かりやすい。

『リコーダーハンドブック』 ハンス＝マルティンリンデ著 矢沢千宜,神谷徹訳

音楽之友社 1983年 請求記号 C37-128

ドイツ生まれのスイスのリコーダー及びフルート奏者、そして作曲家でもあるハンス＝マルティン・リンデ著作によるリコーダーの案内書。リコーダーの構造や種類にはじまり、演奏法、時代ごとの様式などが説明されている。しかし、原著はすでに40年以上も前に書かれたものであり、特に現代における研究など不十分な点も多い。

『リコーダーの世界』 ジョン・トムプソン著 高田さゆり訳

全音楽出版社 1974年 請求記号 C21-911

この本には、リコーダーの発生、衰退、復興まで、リコーダーの歴史が書かれている。リコーダーについて知るための入門書として役立つものである。

『音の不思議をさぐる』 チャールズ・テイラー著 佐竹淳,林大訳

大月書店 1998年 請求記号 C62-612

イギリスの王立研究所は子供達のために毎年著名な科学者を招いてクリスマス・レクチャーを行っている。本書は光学物理学者チャールズ・テイラーが1989年のクリスマス・レクチャーで行った内容を基にしたものである。音や楽器の物理的性質を物理の難しい式を使わずに説明している。

『リコーダー楽譜所蔵目録』 細田勉編

国立音楽大学附属図書館 1987 請求記号 C44-418

中世から現代までのリコーダー曲の目録集である。

数あるリコーダー曲の中から、楽譜を選ぶときに役立つだろう。

『フランス・ブリュッヘン収蔵リコーダー図録 フレデリック・モルガン作図』

全音楽譜出版社 1981 請求記号 C32-708

リコーダーの名演奏家、フランス・ブリュッヘンのリコーダーコレクションを集めた図録。貴重なリコーダーの細部にわたる構造についての解説がある。中には装飾豊かなリコーダーの図版もあり、芸術作品としても興味深い。

雑誌

『Recorder and music magazine』

London 請求記号 P0224

イギリスのリコーダー雑誌

楽譜

『踊りのアルバム』 リコーダー音の風景 Vol.2 吉沢実編

東亜音楽社 1992年 請求記号 H32-850

この「リコーダー音の風景」はリコーダーのかもし出す音の風景、いわゆる音風景をテーマとしたシリーズ曲集である。Vol.2は「踊り」をテーマにした曲集となっており、当時村の広場、街角、そして宮廷に鳴り響いていたリコーダーの音楽を楽しむことができる1冊である。

"the complete Sonatas for treble(alt)recorder and Basso continuo" G.F.Handel
Feber Music 1979 請求記号 H34-263

ヘンデルは、バッハと並び後期バロック音楽の代表者の一人であり、リコーダーのためのソナタを作曲している。現在残っているリコーダー・ソナタの主なものは、通奏低音の練習を目的として書かれたものだと考えられており、リコーダーのパートはシンプルに書かれている。

録音資料

- ・『リコーダーの世界』アムステルダム・ルッキ・スターダスト・クアルテット <XD26943>
- ・『バロック・リコーダー・ソナタ集(1)』ハンス・マリア・クナイス、他 <XD26900>
- ・『Recorder Recital』鈴木俊哉(リコーダー)、宮田まゆみ(笙) <XD51259>
- ・『リコーダーの神技』アムステルダム・ルッキ・スターダスト・クアルテット <XD982>
- ・『ヘンデル:リコーダーソナタ全集ほか』ハンス・マリア・クナイス(リコーダー)、他 <XD26398>
- ・『アルポー時代のダンスと歌』コンヴィヴィウム・ムジクス <XD14400>
- ・『現代日本のリコーダー』ダン・ラウリン(リコーダー) <XD31106>
- ・『笛の楽園』花岡和生(リコーダー) <XD44112>
- ・『ドクチャ』カテリーナ古楽合奏団 <XD27704>
- ・『グリーンスリーヴス』ミカラ・ペトリ・トリオ <XD26771>
- ・『ヘンデル:木管のためのソナタ全集』フランス・ブリュッヘン <XD16832-16833>
- ・『キョロちゃん』栗コーダーカルテット <XD53137>
- ・『平成6年度こども音楽コンクール小学校合奏編』 <XD31815>
- ・『超絶の笛吹き』ケンブリッジ・バスカーズ <XD22434>
- ・『平成14~16年度用小学校音楽教科書教材集中学年』 <XD48089-48092>

映像資料

- ・『バロックの巨匠 ヴィヴァルディ』 <VB2837>
- ・『Viva vivaldi』 <VE191>
- ・『音楽と時代』 <VD1896>
- ・『バッハ物語』 <VD3692>
- ・『La roi dance(王は踊る)』 <VE963>
- ・『バロック・ダンスへの招待』 <VB2749>
- ・『ローマの祝祭~ルネサンスとバロック』 <VD1390-1391>
- ・『Hildegard Von Bingen(ヒルデガルト・フォン・ピンゲンのポートレート)』 <VE571-2>
- ・『交響曲 第3番 変ホ長調 作品55 英雄』ブリュッヘン指揮 <VD102>
- ・『壮麗な餐宴~宮廷と作曲家』 <VD1896>
- ・『栄華の歌~ジョージ王朝のロンドン』 <VD1392>
- ・『聖なる都 アッシジ物語』 <VE553>
- ・『リコーダー基礎技法』 <VB611~613>
- ・『小学校音楽鑑賞共通教材 第3学年 第4学年』 <VD1963-4>
- ・『小学校音楽鑑賞用LD』 <VD1649>
- ・『小学校音楽指導ビデオ集、3・4年 表現編』 <VD1644>
- ・『中学校音楽教育実践指導全集 Vol.3』 <VB2679>

図書館展示 11月 2005

リコーダー
～終わりなき旅～



2005.11.25 編集 国立音楽大学附属図書館広報委員会：高田涼子・染谷周子